

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25285055

研究課題名（和文）異文化交流と近代外交の変容 旧外交から新外交へ

研究課題名（英文）Cultural Exchange and Transformation of Modern Diplomacy: From the Old to New Diplomacy

研究代表者

桑名 映子 (KUWANA, Eiko)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：50384657

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 11,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「ニュー・ディプロマティック・ヒストリー」（新しい外交史）の視点に立ち、日本、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアおよびハプスブルク帝国（オーストリア＝ハンガリー）の6カ国について、外交官や植民地行政官、政策担当者による「文化外交」および「異文化交流」活動を、具体的な事例に即して検証した。扱う時期は当初、19世紀の「旧外交」期から両大戦間期の「新外交」の時代までを予定していたが、日本、イギリス、フランス、ドイツの4カ国については、第二次世界大戦後の時期における国際文化交流と「パブリック・ディプロマシー」の発展まで含めて検討した。

研究成果の概要（英文）： This project has analyzed examples of "cultural diplomacy" and "cultural exchange" by diplomats, administrators, and policymakers of Japan and five European countries—the United Kingdom, France, Germany, Italy, and the Habsburg Empire (Austria-Hungary)—from the viewpoint of "New Diplomatic History." Initially designed to cover the age of "Old Diplomacy" in the 19th Century and the "New Diplomacy" during the Interwar period, our investigation extends to postwar "international cultural exchange" and "public diplomacy" in Japan, the United Kingdom, France, and Germany.

研究分野：中欧・東欧近現代史、外交史

キーワード：外交史 国際関係史 文化交流史 西欧近現代史 東欧近現代史 東アジア近現代史 日本近現代史

## 1. 研究開始当初の背景

ジョゼフ・ナイは『ソフト・パワー—21世紀を制する見えざる力』(日本経済新聞社、2004年)をはじめとする一連の著作の中で、軍事力や経済力のような「ハード・パワー」に対し、強制によらず価値観や文化的志向の輸出による影響力拡大をめざす「ソフト・パワー」の重要性を説いてきた。この考え方は実際の外交活動にも応用されるようになり、文化面の広報活動やイメージ形成に力を入れる「パブリック・ディプロマシー」は、アメリカ合衆国のみならず EU 諸国や日本、中国を含むアジア地域でも、対外政策の重要な柱となっている。

こうした状況を受けて、外交の歴史的分析においても、伝統的な理解の再検討をめざす動きが始まった。「ニュー・ディプロマティック・ヒストリー(新しい外交史)」と呼ばれるこの潮流は、外交を国と国との交渉、外交官を各国政府の代弁者とみる従来の考えに疑問を投げかけ、外交官の私的な活動や交友関係、宮廷儀礼・式典のもつ意味など、通常の外交研究の枠からはみ出してしまう部分に注目する。

この「新しい外交史」を代表する海外の業績としては、Markus Mösslang and Torsten Rlotte (eds.), *The Diplomats' World* (London: Oxford University Press, 2008)、Keith Robbins and John Fisher (eds.), *Religion and Diplomacy* (Dordrecht: Republic of Letters, 2010)、John Fisher and Antony Best (eds.), *On the Fringes of Diplomacy* (Aldershot: Ashgate, 2011)が刊行されていた。

わが国では平野健一郎教授が早くから国際関係における「文化」の役割に注目して豊かな研究成果をあげており、外交史の分野でも日英、日独関係をはじめ、二国間の関係史について数多くのすぐれた研究実績があったが、全体としてみれば伝統的な枠組みの影響力は強いままであった。外交の「ソフト」面に注目した業績として、君塚直隆『ベル・エポックの国際政治』(中央公論新社、2012年)、イタリア美術収集に熱中するイギリス人外交官を描いた松本佐保の論文、東アジア駐在経験をもつドイツ人外交官に関する田嶋信雄の研究がすでに発表されていたが、「新しい外交史」の視点から外交における文化の役割をとらえ直そうとする、国際比較の組織的な試みは、わが国ではまだ始まっていなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は以上のような国内外での研究状況をふまえ、それぞれ専門とする国や地域は異なるものの、外交の文化的側面に対する関心を共有する国内外の研究者15名を結集し、外交官による「異文化交流」と「文化外交」に的を絞って国際比較を行うことを目標とした。

研究対象とする国は日本、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ハプスブルク帝国(オーストリア=ハンガリー)の6カ国で、これらの国から当時の「辺境」であるアジアやヨーロッパの周縁地域へ派遣された外交官たちの経験に焦点をあて、異文化理解のあり方や現地人との交流の広がりを検討した。外交官が植民地・属領の行政官に任命される例も多く、本研究ではそうした場合も含めて考察した。

研究対象とする時期は当初19世紀の「旧外交」期から両大戦間期の「新外交」の時代までを予定していたが、研究会での討論の過程で、戦後の「文化外交」と「パブリック・ディプロマシー」の発展まで含めて検討することが決まり、日本、イギリス、フランス、ドイツの4カ国については、20世紀後半も研究対象に含めることにした。これにともないアンソニー・アダムスウェイトとアントニー・ベストはそれぞれ研究テーマを調整し、新たに福島安紀子(戦後日本担当)と川村陶子(戦後ドイツ担当)が本研究に参加した。

## 3. 研究の方法

(1) 研究会の開催：国内メンバーが集まり、個別研究テーマや研究計画、研究の進行状況を発表し、相互批評と討論を行った。直接の参加が困難な海外研究協力者には、スカイプを通じて発表してもらい討論を行った。2013(平成25)年度、2014(平成26)年度にはそれぞれ計4回の研究会を開催し、それ以後の年度もシンポジウムの準備など、該当するメンバーが必要に応じて集まった。会合での研究発表や討論の内容は、下記に述べるようにホームページ上で公開している。

(2) 史料調査：本研究が分析の対象とした史料は多岐にわたり、公式の外交文書だけでなく、研究対象となる外交官およびその関係者の個人文書(私的な書簡や日記等を含む)の分析がとくに重要となった。多くのメンバーが主として夏期休暇を利用し、国内および国外の文書館・図書館で史料調査を行った。2013(平成25)年度には石田憲、松本佐保、

田嶋信雄、2014(平成26)年度には桑名映子、野村啓介、石田憲、中村綾乃、飯田洋介、川村陶子、君塚直隆、島田昌幸が史料調査を行い、それぞれ研究会でその成果を報告した。

(3) 研究に関する情報の公開：史料調査の成果と研究会での報告や討論、さらに次項で述べるようなシンポジウムや招聘講演に関する情報を、研究発表用のホームページで逐次公開した。ホームページは日本語版と英語版を作成し、情報は日本語と英語(または英語以外の欧文)で掲載した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 各研究者の担当：

[日本]

千葉功：新外交期日本の対外宣伝と映画

福島安紀子：戦後日本の国際文化交流

島田昌幸：日本人外交官(牧野伸顕と内田康哉)のウィーン駐在体験

[イギリス]

松本佐保：サー・オースティン・レイヤードによる遺跡発掘と文化遺産・美術品収集

君塚直隆：インド総督チャールズ・ハーディングの対ムスリム宥和政策

アントニー・ベスト：イギリスの対日文化外交(1921年～1960年)

[フランス]

野村啓介：幕末フランス外交代表の日本理解

アンソニー・アダムスウェイト：1945年～69年のフランス文化外交

[ドイツ]

飯田洋介：ヘルマン・スペック・フォン・シュテルンブルクとドイツの世界政策

中村綾乃：ヴィルヘルム・ゾルフとドイツ領サモア統治

田嶋信雄：アレクサンダー・フォン・ファルケンハウゼンと東アジア

川村陶子：西独対外文化政策におけるヒルデガルト・ハム＝ブリュッヒャーの役割

[イタリア]

石田憲：伊英関係におけるマルタ言語問題

[オーストリア帝国]

桑名映子：ハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギーの報告書に描かれた明治日本

レッシュ・イムレ：帝国外相カーライ・ベエニのボスニア行政と西欧における宣伝工作

上記の担当は便宜上国別に配列してあるが、異文化交流と文化外交というテーマの性質上、その多くが二つまたはそれ以上の国や地域に関わっている。

別項でも述べるように、本研究の成果は数多くの学術論文や図書、学会発表などの形で国内外に発信されている。その一端は、2016(平成29)年度に研究報告書としてまとめられ、のちほど論文集の形で刊行される予定である。

##### (2) 学術的意義：

本研究は、「新しい外交史」の視点から日本とヨーロッパの主要6カ国について、19世紀から第二次世界大戦後に至る時期の異文化交流と文化外交・対外文化政策の国際比較を試みた。

各個別研究の意義や国際比較により得られた知見を一言でまとめることは困難だが、「旧外交」期についていえば、ヨーロッパの「先進国」から「辺境」地域に派遣された外交官や植民地行政官の態度には、ある程度の共通性が存在することがわかった。彼らの多くは教養ある貴族層ないし富裕ブルジョワ層の出身者で、東洋の文明や文化に対し一定の理解や共感を示し、文化を通じた現地社会との交流が外交関係の円滑化につながる例もあった。

両大戦間期、とりわけ1930年代以降になると、各国政府・外務省や新たに設立された専門機関が、対外宣伝の手段としての「文化」をそれぞれのやり方で活用しようと、しのぎを削ることになる。戦後は一転して平和的な「国際文化交流」が主流となるが、それはフランスのような戦勝国にとっても、またドイツや日本のような敗戦国にとっても、政治的利害を超えた中立的・普遍的価値としての「文化」こそが、対外イメージ戦略の最も有効な手段と考えられたからである。

このように、国際政治における「文化」の意味や役割は、時代により大きく変化してきた。本研究で取り上げた地域や時代はごく限られたものにすぎないが、これらの事例研究を重ね合わせることで、日本とヨーロッパを起点として世界に広がる交流と交渉のネットワークが見えてくる。多くの点でまだまだ不十分ではあるが、今後研究をさらに発展させ、「異文化交流からみたグローバル・ヒストリー」の試みへとつなげることができればと願うものである。

海外の研究動向を見ても、外交史研究の新しい流れは勢いを増している。2015年9月、桑名はケンブリッジ大学で開催された国際学術会議 Sovereignty and Imperialism: Non-European Powers in the Age of Empire

で研究発表を行う機会を得たが、非ヨーロッパ諸国が帝国主義支配を免れ、主権を守るために選んだ「生き残り戦略」の国際比較がこのプロジェクトのテーマである。宮廷儀礼や外国訪問等、非ヨーロッパ諸国の側からの「文化戦略」といえる要素も扱われており、研究組織の規模や対象とする地域の点で歴然たる差はあるものの、本研究といわば表裏一体の関係にあると感じた。

このほか、2015年8月の国際歴史学会議済南大会でも、New Approaches to History of Diplomatic Practices と題するジョイント・セッションが開催され、ジュネーブ大学のマティアス・シュルツ教授らが報告した。このセッションについては、組織者の一人である小檜山ルイ教授が『歴史学研究』2016年4月号(No.943)に紹介記事「外交実践の歴史のための新しいアプローチ」を寄せている。

### (3) シンポジウムの開催：

2015(平成27)年5月17日に富山大学で開催された第65回日本西洋史学会大会で、本研究グループは小シンポジウム2「異文化交流と近代外交の変容」を主催した。川村の司会により松本、野村、桑名、中村の4名が研究発表を、石田、飯田、島田、田嶋の4名がコメントを担当し、活発な討論が行われた。

2015(平成27)年11月21日、22日には、二日間にわたり聖心女子大学で研究発表のためのシンポジウムを開催した。成城大学木畑洋一教授(当時)による開会の辞、前ユネスコ事務局長松浦晃一郎様による基調講演のあと、本研究メンバーがそれぞれ担当する研究テーマについて報告を行い、多くの鋭い質問や有益なコメントが寄せられた。

### (4) 招聘講演の開催：

本研究が対象とする研究分野への理解を深めるため、2回にわたり招聘講演を開催した。

2015年6月26、28、29日には、ウィーン大学のオリヴァー・ラートコルプ教授による講演会を、東京大学(駒場)、聖心女子大学、京都大学人文科学研究所で開催した。講演のテーマはそれぞれ、オーストリアにおけるナチ支配の遺産と戦後補償問題(26日)、20世紀オーストリア史の「記憶の場」としてのウィーン・フィル(28日)、オーストリアにおける戦後補償問題とナチ支配の長い影(29日)であった。

2017年1月11、12、13日には、イエール大学のティモシー・スナイダー教授をお迎えし、東京医科歯科大学の高尾千津子教授を研

究代表者とする科研費 基盤研究(B)「ソ連・東欧におけるホロコーストの比較研究」、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター、慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュートとの共催により、東京大学(駒場)、慶應義塾大学(三田)、聖心女子大学で講演会を開催した。三回にわたる講演会はスナイダー教授のご著書にもとづいており、テーマはそれぞれ『ブラッドランド-ヒトラーとスターリン 大虐殺の真実-』(11日)、『ブラックアース-ホロコーストの歴史と警告-』(12日)、『ブラザーランド-諸国民の起源-』(13日)であった。

いずれの招聘講演も大きな反響を呼び、研究者・学生はもとより一般の方にも多数ご参加いただいた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計21件)

野村 啓介、Diplomatie française a la recherche de la Constitution politique du Japon avant la Restauration de 1868、ヨーロッパ研究、査読無、12巻、2017、pp. 1-21

石田 憲、帝国をめぐる文化外交、思想、査読有、1107号、2016、pp. 60-76

飯田 洋介、ビスマルクとフランス・ナショナリズム、西洋史論叢、査読有、38巻、2016、pp. 19-34

川村 陶子、Methodological Duality and Conceptual Plurality of Culture in International Relations、成蹊大学文学部紀要、査読無、51巻、2016、pp. 1-19

君塚 直隆、エリザベス二世と戦後イギリス外交、国際政治、査読有、174号、2013、155-169

[学会発表](計36件)

川村 陶子、1970年代西ドイツにおける立法府と文化政策、日本文化政策学会第10回研究大会、2017年3月25日、静岡文化芸術大学(静岡県・浜松市)

石田 憲、Studio politico comparative sulla Seconda Guerra Mondiale fra Giappone

e Italia、Italia-Giappone, Influenze e Scambi, 2016年10月24日、ボローニャ(イタリア)

松本 佐保、Vatican and Inter-religious dialogue、British International History Group Conference, 2016年9月8日～9日、エディンバラ(イギリス)

中村 綾乃、Denazification in Occupied Japan, Symposium "Seventy Years to the End of the War in Asia," 2016年1月29日、ミュンヘン(ドイツ)

福島 安紀子、日本の文化外交と平和、戦後70周年記念シンポジウム、2016年1月29日、国際文化会館(東京都・港区)

桑名 映子、At a Crossroads of Civilization and Barbarism, Sovereignty and Imperialism: Non-European Powers in the Age of Empire, 2015年9月11日、ケンブリッジ(イギリス)

桑名 映子、An Austro-Hungarian Diplomat in Meiji Japan, ICCEES IX. World Congress, 2015年8月4日、神田外語大学(千葉県・千葉市)

福島 安紀子、Cultural Property and Peace, NATO Seminar on Cultural Property Protection, 2015年6月13日、サラエヴォ(ボスニア・ヘルツェゴヴィナ)

桑名 映子、野村 啓介、中村 綾乃、松本 佐保、小シンポジウム2・異文化交流と近代外交の変容、第65回日本西洋史学会大会、2015年5月17日、富山大学(富山県・富山市)

川村 陶子、ドイツ対外文化政策の刷新と継続、日本国際政治学会、2014年11月14日、福岡国際会議場(福岡県・福岡市)

飯田 洋介 '1864' in den Augen Japans, Der Wiener Friede 1864 als deutsches, europeaisches und globales Ereignis, 2014年10月17日、フリードリヒスルー(ドイツ)

田嶋 信雄、The First World War and 'German Agents on Horseback', The East Asian Dimension of the First World War,

2014年9月6日、ボーフム(ドイツ)

川村 陶子、Establishing a German Cultural Institute in Tokyo, Culture and International History V, 2014年4月30日、ベルリン(ドイツ)

[図書](計35件)

田嶋 信雄、工藤 章 編、東京大学出版会、ドイツと東アジア 一八九〇―一九四五、2017、720(1-28、31-89、353-394、489-546)

中村 綾乃、東京大学出版会、ドイツと東アジア 一八九〇―一九四五、2017、720(253-299)

田嶋 信雄、吉川弘文館、日本陸軍の対ソ謀略 日独防共協定とユーラシア政策、2017、200

松本 佐保、文藝春秋、熱狂する神の国アメリカ、2016、272

君塚 直隆、細谷 雄一、永野 隆之 編、勁草書房、イギリスとアメリカ 世界秩序を築いた四百年、2016、336(12-51)

君塚 直隆、中央公論社、物語 イギリスの歴史(上)、2015、240

君塚 直隆、中央公論社、物語 イギリスの歴史(下)、2015、264

君塚 直隆、光文社、肖像画で読み解くイギリス王室の物語、2015、234

松本 佐保、ミネルヴァ書房、山本 正、細川 道久 編、コモンウェルスとは何か ポスト帝国時代のソフトパワー、2014、336(191-220)

川村 陶子、日本経済評論社、権 五定、斎藤 文彦 編、「多文化共生」を問い直す、2014、288(87-112)

田嶋 信雄、東京大学出版会、工藤 章、田嶋 信雄 編、戦後日独関係史、2014、544(25-82)

石田 憲、講談社、日独伊三国同盟の起源 イタリア・日本から見た枢軸外交、2013、254

松本 佐保、中央公論新社、バチカン近現代史、2013、288

田嶋 信雄、雄松堂、日独交流史編集委員会編、日独交流 150 年の軌跡、2013、345(223-230)

〔その他〕

ホームページ

<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/department/major/3/ekuwana/jp/index.html>

報道関連情報

ティモシー・スナイダー教授(イエール大学)講演会(2017年1月)：

・NHK BS1「国際報道 2017」(1月18日放送)

<http://www6.nhk.or.jp/kokusaihoudou/bs22/lounge/index.html?i=170118>

・朝日新聞(1月19日朝刊)

朝日新聞 DIGITAL：

<http://www.asahi.com/articles/DA3S12754130.html>

・読売新聞(3月13日朝刊)

6. 研究組織

(1)研究代表者

桑名 映子(KUWANA, Eiko)

聖心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：50384657

(2)研究分担者

野村 啓介(NOMURA, Keisuke)

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：00305103

石田 憲(ISHIDA, Ken)

千葉大学・法政経学部・教授

研究者番号：40211726

中村 綾乃(NAKAMURA, Ayano)

大阪大学・言語文化研究科・講師

研究者番号：10467053

飯田 洋介(IIDA, Yosuke)

岡山大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：50506152

松本 佐保(MATSUMOTO, Saho)

名古屋市立大学・人間文化研究科・教授

研究者番号：40326161

千葉 功(CHIBA, Isao)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：50327954

川村 陶子(KAWAMURA, Yoko)

成蹊大学・文学部・教授

研究者番号：80302834

田嶋 信雄(TAJIMA, Nobuo)

成城大学・法学部・教授

研究者番号：80179697

君塚 直隆(KIMIZUKA, Naotaka)

関東学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：80331495

(3)連携研究者

福島 安紀子(FUKUSHIMA, Akiko)

青山学院大学・地球社会共生学部・教授

研究者番号：90756553

(平成27年度より連携研究者)

(4)研究協力者

島田 昌幸(SHIMADA, Masayuki)

学習院・高等科・教諭

ADAMTHWAITE, Anthony

University of California Berkeley,  
Department of History, Professor Emeritus

BEST, Antony

London School of Economics and Political  
Science, Department of International  
History, Associate Professor

RESS, Imre

Hungarian Academy of Sciences, Research  
Centre for the Humanities, Institute of  
History, Senior Research Fellow